

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
11	宇都宮学のすすめ	宇都宮大学 行政学研究室B	
		成澤 友里	宇都宮大学 国際学部
		指導教官 氏 名	中村 祐司

## 1 提案の要旨

私達が住んでいる宇都宮市は、餃子の街として全国的に有名である。統計局 HP によると、宇都宮市の平成 20～22 年平均の「ぎょうざ」の年間支出金額は 5,009 円で、全国平均 (2,004 円) の 2.5 倍になっている<sup>1</sup>。餃子を求め、年間 80 万人もの観光客が訪れる<sup>2</sup>というのだから、宇都宮市の観光の柱とすることができるだろう。

農業においては全国有数の米の産地である。宇都宮市 HP によると、リンゴやイチゴ、宇都宮牛やトマト<sup>3</sup>などの特産品があるようだ。

そのほかにも、調査していくと、工業や商業といった産業や、歴史的、文化的な視点から見ても非常に魅力的な街だということが分かった。しかし、宇都宮市に住む住民は、この魅力あふれる街のことをどれだけ知っているのだろうか。ただ漫然と生活しているが、実は宇都宮のことをよく知らないという人も多いのではないだろうか。そこで私たちは、子供も大人も楽しみながら地域のことを知ることで、自信を持って宇都宮の良さを人に話せる市民育成を目指したい。

現在の宇都宮市では、小学生が宇都宮を知るための授業を社会科の時間に行っている。また、大人が市のことを学ぶための市民講座もいくつか開講されている。しかし、せっかく学んだことを生かす機会に恵まれていないのではないかという印象を受けた。そこで、私たちの提案では、地域について学ぶのみならず、調べたことを受講生で共有し合い、それを観光や国際交流などに活かしていくことで更なる魅力的な街になることを目指す。

そのために、私たちは、宇都宮大学で「宇都宮学」という公開講座を開講する。宇都宮学の習得を「学び」「共有」「発信」の 3 つのステップに分け、それを経ることで住民がただ知識を学ぶだけでなく、学んだことを生かすことのできる場を提供する。また、科目は「みず学」「もり学」「のうぎょう学」「ぎょうざ学」「商店学」「まつり学」「きぶな学」の 7 つを用意し、それぞれの科目に関連性を持たせることで、様々な視点から見た宇都宮を発見しやすくした。講師を市役所職員、市民、宇都宮大学生の三者が担うのも本提案のポイントである。

本提案における宇都宮学とは、生涯学習・社会教育の実践として市民が学び、発展させていく学問である。これを学ぶことによって、住民の地域に対するアイデンティティが高まり、街づくりの動機づけになることが期待される。これは、地域課題の新たな切り口を発見し、宇都宮をより深く知るための足掛かりとなるような提案である。

<sup>1</sup> 統計局 HP 「第 2 章 家計からわかる暮らしの特徴」

<http://www.stat.go.jp/data/kakei/family/4-2.htm> (平成 23 年 10 月 26 日閲覧)

<sup>2</sup> YOMIURI ONLINE 「宇都宮餃子 (宇都宮市)」

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/tochigi/kikaku/055/9.htm> (平成 23 年 10 月 26 日閲覧)

<sup>3</sup> 宇都宮市 HP 「特産物のご案内」

<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/nogyo/tokusan/index.html>  
(平成 23 年 10 月 26 日閲覧)

## 2 提案の目標

本提案では、宇都宮を知ることはもちろんとして学んだことを発信し、より多くの人々にその魅力を知ってもらうことを目指す。さらにそれを街づくりに生かし更なる魅力を創造する。

具体的には、まず、座学では味わえない経験を通して楽しみながら宇都宮市について学ぶ。教室でただ授業を聞き学ぶというのはどうしても受け身になりがちである。また、興味は人それぞれであるので、学んで楽しいと思えることも人によって異なるはずだ。よって本提案では、複数の科目の中から自分の興味のあることを実際に体験してもらい、分からないことは積極的に質問しながら学ぶということを重視したい。体験することでその難しさに気づくこともあるだろうし、楽しかった体験というのは忘れないものである。

グループワークを通じたコミュニケーション能力の高まりにも期待したい。インターネットで、実際に地元学を取り入れている岩手県立葛巻高校の事例を目にした。葛巻高校では、「くずまき地元学」を平成14年度に導入し、8月21日と22日の2日間行った。1日目にはフィールドワーク（集落点検）を行い、2日目はワークショップ（まとめ作業）を行ったところ、生徒達が「地元なのに知らないこと」に気付いた他に思わぬ副産物があったという。それがコミュニケーション能力の高まりである<sup>4</sup>。相手の話を聞き、それに対して意見を述べたり、自分の役割を自覚するということは、社会人に必須のコミュニケーション能力である。

さらに、留学生や県外出身者との交流を通して、様々な差異を発見し、それを認められる人間になってもらいたい。同じ日本の中でも様々な文化があり、多種多様な差異がある。ましてや外国と比べればなおさらである。お互いの地域を紹介し合うことでその差異に気づき、認めることで、物事を多角的・多面的にとらえることの出来る人間になってもらいたい。これこそが国際社会で活躍できる人間の求められている能力である。

また、街づくりに積極的に取り組み、宇都宮を更に良くしようという意識を持つためのきっかけづくりになるような学習の場を提供する。街づくりとは自分の街を知ることから始まる。宇都宮市では、市民がより快適に、充実した暮らしを送れるような様々な取り組みがなされている。何か不便なことがあった時や新しい取り組みを市に提案しようとするとき、その多くは既に行政によってなされているだろう。実際、私たちが本提案書を書くにあたって、宇都宮市の現状を調べたところ、素晴らしい政策がすでになされていることがわかった。そのうえで、さらなる宇都宮市の発展を要望するのなら、まず私たちの街のことを知らなければならない。宇都宮学を学ぶということをきっかけにして、街づくりに関心を持ってもらうことができるだろう。

最後に、宇都宮に愛着を持つことで、市民に積極的にその魅力を発信してもらいたい。この提案の中心は、学んだ知識を内外に向けて発信することにある。せっかく学んだ宇都宮の素晴らしさを市民の内だけでとどめておくのはまさに「もったいない。」しかし、それを他県や外国から来た人、さらには別の県に向けて発信することで、すでに宇都宮に住んでいる人はずっとこの街にいたいと思うかもしれない。他県の人には宇都宮に観光に来たいと思ってくれるだろう。

本提案を実現できればこのような目標が達成できると考えられる。

## 3 現状の分析と課題

### 1) 宇都宮を市民が学ぶことに関する現状

学校教育課の方にインタビューし、小学校での宇都宮市についての学び方を教えていただき、国際交流プラザの方に大人が行っている宇都宮の学びの場を教えていただいた。子供も大人も宇都宮市について学び、何か地域をよくできないかと模索しているのが現状である。

<sup>4</sup> いわて地元学事例集「総合的な学習の時間に地元学を」

[http://www.aiina.jp/environment/digieco/kankyoku\\_jimoto/jimoto/05jissen/index06.html](http://www.aiina.jp/environment/digieco/kankyoku_jimoto/jimoto/05jissen/index06.html)  
(平成23年10月20日閲覧)

### ① 子供の場合

小学校の社会科の授業では3, 4年生で地域の学習を行う、学校の周りを知ることから始まって市の様子、県の様子を調べる。宇都宮市を学ぶ場合、文部科学省の教科書では補えないため、副読本「私たちの宇都宮 上下」を市が発行している。これは、小学生には無償で提供しているが、一般の方でも教科書供給所で購入することができる。

地域の学習では、主に地理の学習につながるような宇都宮市の地形や土地利用を学んだり、学校周辺の商店街や公共施設の場所を把握し、その地区の交通状況などの特徴を話し合う授業を行っている。

また、中学2年生になると、「宮っこチャレンジ」というチャレンジウィークを経験する。これは、市内中学の2年生が、一週間にわたって、地域の多くの人々と触れ合いながら、勤労体験やボランティア活動などの社会体験活動を行うものである。これにより、働くことの尊さや社会のためになることを積極的にやる意義などを実感させ、将来、社会の一員として主体的に生きていこうとする自覚を促す。また、地域ぐるみで子どもを育てる意識も高めている<sup>5</sup>。

### ② 大人の場合

宇都宮市 HP「生涯学習・教育」のページを見てみると、大人が宇都宮を学ぶ市民講座がいくつかあることが分かった。

場所	講座名	回数	対象	内容
宇都宮市民大学	もったのしいまち宇都宮になるか～観光都市～宇都宮を目指して～	全7回	市内に在住・通勤・通学している人	宇都宮の地域資源を見つめなおし、街づくりに生かす。 講義とパネルディスカッション中心。
宇都宮南生涯学習センター	郷土の歴史探求「奥の細道」	全3回	市内在住の成人	「奥の細道」を通して郷土の歴史を学ぶ。
	とちぎ探究Ⅲ	全6回	市内在住の成人	栃木の歴史や文化、ゆかりのある人物の学習。
上河内生涯学習センター	わくわく体験教室	全6回	宇都宮市内在住の小学1年生から6年生とその保護者	自然や伝統行事に触れ、楽しい「ふるさと」体験をする。
	ふるさと再発見	全8回	宇都宮市内在住の成人男性	ふるさとに伝わる文化や伝統に触れ、郷土への理解を深める。
	ライフアップセミナー in かわかみうち	全8回	宇都宮市内在住の成人	歴史や現代的課題について学ぶ。

また、地域コミュニティセンターでは、予算が市によって割り当てられ、その範囲の中で地域の文化や魅力の再発見を行う活動を実施している。地域コミュニティセンターは自治会と密接な関わりを持ち、地域に根差した取り組みを行っている。例えばその一つとして西地域コミュニティセンターが行っている「悠遊セミナー」がある。平成23年度は、全7回行われる予定であり、

<sup>5</sup> 宇都宮市 HP「社会体験学習『宮っこチャレンジウィーク』」  
[http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/shogai\\_gakushu/shochugattukou/kyoikujigyo/003194.html](http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/shogai_gakushu/shochugattukou/kyoikujigyo/003194.html) (平成23年10月22日閲覧)

その中の一回では、「【あなたの心の原風景】～うつのみや百景～」と題し、宇都宮市都市計画科が出前講座を行った<sup>6</sup>。

## 2) 課題

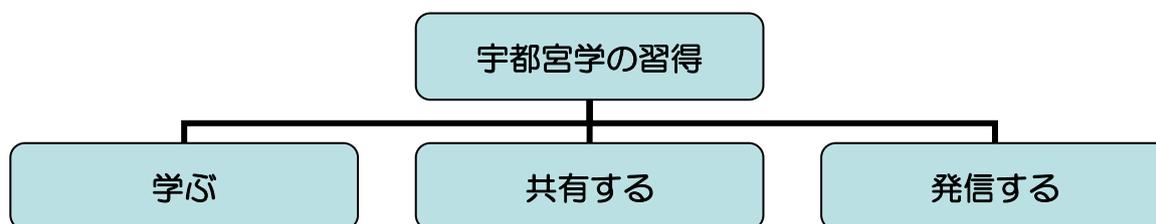
小学生の場合、社会科や総合の時間で地域のことについて学べるので、地域の理解を得る機会に恵まれているようである。しかし、発表の場がクラス内でとどまるため、地域全体で知識を共有できない。

大人の学び方の場合、既存の学び方では、講座間のつながりが見つけられず、内容も重複していることが多い。よって、授業で見つけた地域の資源を宇都宮市全体へとつなげる広い視野を持ちづらい。市民の各々で市を学ぶことはできているが、そこから一步踏み出して、宇都宮市民がビジョン（どんな市としたいかという目標）を持てるようにつなげなくては、街づくりは空回りになってしまうだろう。また、講座の回数も6回～8回のところが多く、回数としては少なめな印象を受けた。継続的に市民が集まり、話し合ったうえで、それを発信するべきである。

市が推し進めている宇都宮ブランド化戦略をさらに推し進めるためには、子供(小学生～高校生)、大学生、大人のみんなで宇都宮を学ぶ場を構築することが重要だ。

## 4 施策事業の提案

宇都宮学を習得には、次の3つのステップが必要であると考える。



### ステップ1：宇都宮を学ぶ

宇都宮大学で宇都宮学という公開講座を開講する。講座の科目（きぶな学、ぎょうぎ学など）は複数用意する。

参加者を募集する際には、小学校や自治会を通してチラシを配布し、広く募集する。また、宇都宮大学の学生にも参加してもらえよう、大学内でも広報活動を行う。

対象者は小学5・6年生から大人までとし、月に2回学習する。小学5・6年生以上を対象とする理由は、小学3・4年生で社会について学んだことが下地にあるからである。また、小学3・4年生以下ならば、地域のよさに触れてもらうことの方が重要であると考えられる。

地域の大人と子供がともに学ぶことで地域的な連携が強化される。また、科目は体験学習中心とし、自分の興味のある科目を選ぶことで、楽しみながら宇都宮について勉強することができる。

講師は市民と市役所職員、学生が担う。以下にその具体例を記す。

<sup>6</sup> 西地域コミュニティセンター 「コミュニティセンター事業報告」  
[http://www2.ucatv.ne.jp/~nisi\\_com.snow/community/2011/2011event.htm](http://www2.ucatv.ne.jp/~nisi_com.snow/community/2011/2011event.htm)  
(平成23年10月26日閲覧)

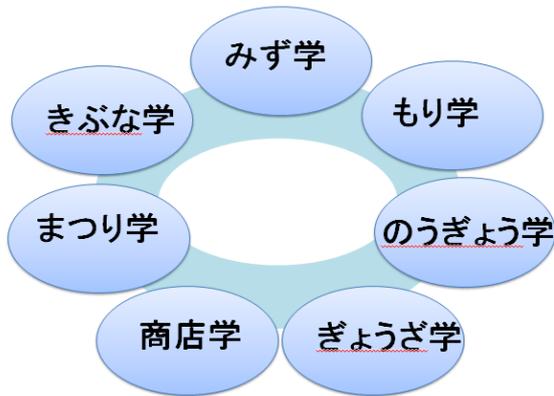


図1 学びの図式化

単発での取り組みは各々すでに行われているが、取り組みはひとつの分野を知ることだけで終わらないようにすることが大切である。そのために、図1のようにそれぞれの学問が関連性をもつことで地域の視野が広がることを期待できる。

また、それぞれが興味のある学問を選び、それを全体で共有するべきである。

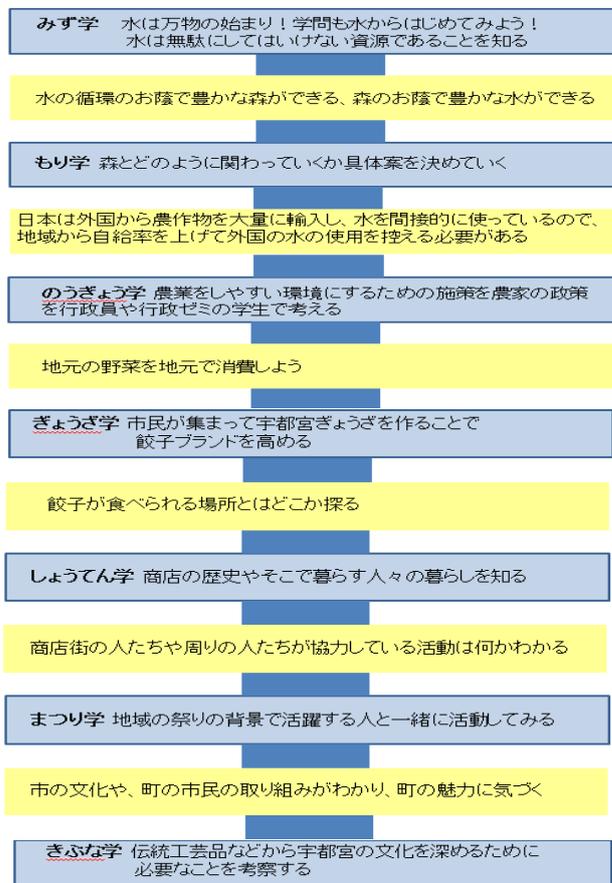


図2 宇都宮学をつなぐの一例

上記の「みず学」、「もり学」、「のうぎょう学」、「商店学」に近いものはすでに小学校や生涯学習センターなどで教えられているが、「ぎょうざ学」、「きぶな学」は私達が独自に考えた学問である。

宇都宮市職員と学生、市民が講師となっていくという点と、地域全体のことを広い視野で見ることができるよう、学問同士の共通点をつなぎ合わせるといのは新しい試みである。

宇都宮学は、あくまで市をより深く知る上でのスタートであって、市民と行政が一体となることにより発展させていく。

## ①みず学

### カリキュラム1：家で飲んだり使ったりしている水は、どこから来てどこへ行くのかを探る 水は無駄にしてはいけない資源であることを知る

現在、世界人口の増加、それと表裏一体の関係にある農業とりわけ灌漑農業の発展が淡水の消費を飛躍的に増加させ、水が不足する状態が世界各地で発生している。

日本は島国なので水不足は深刻に考えられていないようだが、食料などの輸入を通じ間接的に大量の水を使用していることもあり、無関係な問題ではない。

地域ごとに持続可能で最適な水循環系を構築するための取り組みの必要性が指摘されていることを背景として、宇都宮市から世界的課題に取り組むことが必要だ。

その足掛かりとして、家で飲んだり使っている水は、どこから来てどこへ行くのか調べ、水を何も考えずに享受する姿勢を改める必要がある。そしてそれを発表した後、「驚いたこと」、「気が付いたこと」を互いに話し合う。まず今と昔では川はどう変わったのか年長者に聞いたり、下水道局に行って自分の地区はどこからきた水なのか経緯を調べ上げる。



写真1. 田川<sup>7</sup>

宇都宮市の上下水道局で、水を大事にしようと呼びかける講演を小学校に対して行っているが、大人も自分たちが飲む水についてより深く調べる機会は少ない。

大人と子供が参加し、上下水道局や環境部 環境政策課、経済部 農業振興課の方などと街に出かけて調べるだけにとどまらず、水に関する様々な意見を出し合うことが重要である。

## ②もり学

### カリキュラム1：宇都宮の森で合宿講演会を行う 森とどのように関わっていくか具体案を決めていく

現在、森林の荒廃化が大変懸念されており、森林の持つ多面的機能を維持するために人工林の手入れをしながら次世代の森づくりにつなげていくことが課題である。

宇都宮市の取り組みとしては、自主的に森づくりを行う森林ボランティアを育成するための森林整備教室を森林公園 やろまんちっく村で開催している。

その活動を活かして、都市整備部 公園管理課や経済部農村整備課、自然科学の研究者の方などを招き、森づくり施策の概要を深く知る必要がある。



写真2. 宇都宮市森林公園の赤川ダムと古賀志山<sup>8</sup>

<sup>7</sup> しもつけふるさと写真館「No.008 田川」（平成12年4月26日撮影）

<http://www.shimotsuke.co.jp/select/furusato-photo/machinami/20100603/331186>（平成23年10月22日閲覧）

<sup>8</sup> 宇都宮市 HP「宇都宮市森林公園」

<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/shinrin/shinrinkouen/index.html>（平成23年10月22日閲覧）

### ③のうぎょう学

カリキュラム：農家体験して地域資源を多く活用する農業を知る  
農業をしやすい環境にするための施策を考える



写真3. 宇都宮市の野菜<sup>9</sup>

農家の人に農業の楽しさ、大変さや、これからの農業に対する展望をうかがい、実際に農業体験を行う。それにより、野菜が育つ力、それを作る人の力に圧倒されるだろう。この際、経済部 農業振興課の方と一緒に、農家を守る為の具体策を市民で考える。

### ④ぎょうざ学

カリキュラム1：餃子の入っている具を身近な農家の人から仕入れて、市民で餃子を作ってみる  
みんなで宇都宮ぎょうざを作ることで餃子ブランドを高める。



イラスト1. スタミナ健太<sup>11</sup>

平成 20～22 年平均の家計調査品目別データ（二人以上の世帯（1世帯当たり年間の支出金額及び購入数量））によると、宇都宮市は餃子の年間支出金額が 5009 万円<sup>10</sup>で、政令都市の中で一位を誇っている。

この科目を受講することで、家族と作れて楽しく食べられる餃子のよさを体感してもらいたい。家族から友達まで、さらに広がった輪の中で一丸となって、餃子と一緒に作る機会があってもいいのではないかな。

カリキュラム2：なぜ餃子の街になったのか、餃子の歴史を学ぶ  
餃子で街づくりするとはどういうことなのか考える

全国的ブランドとなった「宇都宮餃子」の取り組みは平成2年、宇都宮市役所職員の提案から始まり、次第に民間主体の活動が活発化し、独自のキャンペーン活動や、商工会議所との連携を図りながら、知名度を上げていった。平成10年に商工会議所が空き店舗対策事業の補助金による実験店舗「おいしい餃子とふるさと情報館・来らっせ」を開設し、宇都宮餃子会メンバーの店舗が出店するなどの動きを見せている。小学生のうちから、こういった餃子の街づくり施策の数々を調べることで、街づくりとは何かを知る足がかりになる。

<sup>9</sup> 宇都宮市 HP「うつのみや地産地消推進店を募集します」

<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/nogyo/19322/017465.html>（平成23年10月22日）

<sup>10</sup> 総務省統計局「家計調査（二人以上の世帯）都道府県庁所在市及び政令指定都市別ランキング（平成20～22年平均）」<http://www.stat.go.jp/data/kakei/5.htm>（平成23年10月22日閲覧）

<sup>11</sup> 宇都宮餃子館 HP <http://www.gyozakan.jp/>（平成23年10月22日閲覧）

## ⑤まつり学

カリキュラム：宇都宮で行われている祭りとその由来を知る

宇都宮市では、春渡祭（1月15日）、節分祭り（2月3日）、宇都宮城桜祭り、田舞祭など様々な祭りやイベントが執り行われている。それらは何故はじまり、どのような目的を持って行われているのか、知っている人はどれだけいるだろうか。祭りとはその街の独自色の強い文化であり、地域を知るにはうってつけである。また、観光者が多く集まるのも祭りの特徴といえる。市街の人が積極的に足を運びたいくなるような祭りのPR方法などを学ぶのも面白いだろう。



写真4. 春渡祭り<sup>12</sup>

## ⑦商店学

カリキュラム：商店街の歴史と工夫を探る

大型スーパーやデパートなどが続々と出店し、商店街はその煽りを受けている。しかし、オリオン通りをはじめとする宇都宮の商店街は様々な工夫を凝らし、買い物客を楽しませている。その一つがオリオンナイトバザールである。これは、商店街は閉店するのが早いというイメージに着目し、そのイメージを払拭するために毎月1回行われているイベントである<sup>13</sup>。

商店街の工夫を知るために実際に商店の手伝いをしたり、宇都宮オリオン通り商店街振興組合の方に話を伺う。

商店街が元気でなければ市内全体が勢いを失ってしまう。そうならないために、商店街にお客を呼ぶにはどうしたらいいのか、受講者で話し合う。



写真6 オリオン通り<sup>14</sup>

## ⑦きぶな学

カリキュラム1：きぶなとは何かを学ぶ

黄鮎きぶなという伝統工芸品を作る方にお会いして、実際に作ってみる

黄鮎とは宇都宮市を代表する郷土玩具である。宇都宮市に住んでいた昔の人が、黄鮎を食べたら天然痘が治ったという伝説があり、病気よけとしてこの黄鮎の形をした物を毎年新年に神に供えるようになったそうだ<sup>15</sup>。

自分の街の伝統工芸品をこよなく愛する街とあまり浸透していない街とがあるが、宇都宮市は

<sup>12</sup> 宇都宮市 HP 「年間イベント情報（平成23年度分）」

[http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kanko/event\\_kanko/nenkanevent18.html](http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kanko/event_kanko/nenkanevent18.html)  
（平成23年10月23日閲覧）

<sup>13</sup> オリオン通り HP 「商店街の歴史」

<http://www2.ucatv.ne.jp/~u-orion.snow/>（平成23年10月24日閲覧）

<sup>14</sup> オリオン通り HP TOP画面

<http://www2.ucatv.ne.jp/~u-orion.snow/>（平成23年10月23日閲覧）

<sup>15</sup> 宇都宮市役所 HP 「伝統工芸一覧」

<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/jibasangyo/002255.html>  
（平成23年10月22日閲覧）

どちらだろうか。いずれにせよ各都道府県の工芸者を取り巻く環境は、後継者不足や需要の減退など年々激しさを増している。

伝統工芸品を実際に作ったり、伝説に基づく絵本を作ったりするほか、経済部商工振興課の方などをファシリテーターとして招き、伝統工芸品とはどんな存在なのかから考えることから市の文化を知ることによって発展させる。

## カリキュラム2：鮒が食べられない現在を探る

普段、鮒を食べないのはなぜか考え、食糧問題について年長者と話し合う

普段なじみがない鮒だが、昔は春の農作業が一段落したころよく食べていた。しかし、今は農薬の心配や、昔ほど食べ物に困っていないことにより、鮒やウグイなどの川魚はあまり食べなくなった。

食べ物がなかったころの話を年長者に伺ったり、外国から食糧制裁を受けた歴史について学び、食糧問題を考える足掛かりとする。



写真6. きぶな<sup>16</sup>

## ステップ2：宇都宮学を共有する

各科目で自分たちが学んだことを、他の科目を選んだ人にわかりやすく伝える。その際、発表方法などは指定せず、各科目の参加者でグループワークを行い、発表のために話し合ったり、共同で発表準備を行うことでコミュニケーション能力の発達を目指す。

大人の場合はこれに加え、より良い宇都宮をつくるための街づくりについて話し合う。宇都宮学を学んだ経験が街づくりに生かされるはずである。

## ステップ3：宇都宮の魅力を発信する

### ① 内外に向けて情報を発信

市民の目線から見た宇都宮市の魅力をパンフレットや新聞、WEBに掲載するなどの形で市の内外に向けて発信する。

宇都宮市に住んでいる住民に向けては、パンフレットを市役所や公共施設などに置いてもらい、住民に手に取ってもらう。そのほかにも駅の観光案内所やアンテナショップなどに置き、市民以外の人に宇都宮の素晴らしさについて知ってもらうことで、観光客の増加を狙う。

### ② 地域交流に生かす

宇都宮市には、外国人や県外出身者が多数暮らしている。彼らと、市民が学んだ宇都宮学を使って交流を図る。

具体的には、文化交流イベントを宇都宮大学で開催し、その中でお互いの地域について紹介する。イベントのコーディネーターは宇都宮大学国際学部の学生が行い、留学生も多数参加してもらえるような広報活動を行う。

各グループが工夫を凝らした発表を行い、地域の差異や共通性について話し合うことで、お互いの文化を認め合い、また、自分の文化的機軸を確認することが狙いである。

<sup>16</sup>うつつのみやの伝統工芸「黄（き）ぶなについて」

<http://www.ueis.ed.jp/kyouzai/sinden17/kibuna/kibuna.html>（平成23年10月22日閲覧）

#### 4-1. 行政の役割

宇都宮学を学ぶにあたり、予算の提供を行う。また、講座開講の際の広報活動や講師の役割を担う。例えば、きぶな学の場合は経済部商工振興課、みず学の場合は上下水道局といった具合に、それぞれの学問と関係深い部署の職員が担当する。

参加者が作ったパンフレットを市役所に置いたり、宇都宮学で学んだことをWEBに掲載するなどの情報発信の役割や、イベントへの積極的参加も行政に期待する。

#### 4-2. 宇都宮大学の学生の役割

宇都宮学を開講するに当たり、コーディネーターとなって、講師である市民・行政と受講者をつなぐパイプ役となる。宇都宮学には様々な学科があり、エキスパートである市民や行政の担当者も各々異なっている。それらの調整役となるのが宇都宮大学の学生である。

また、イベント開催の際には、宇都宮大学内での広報活動は学生が積極的に行う。

### 5 提案実現への課題

現在ある宇都宮市を学ぶための講座は、内容に重複が見られる。そのため、いくつか講座をまとめて整理する必要がある。宇都宮学に一体感を持たせることがこの提案のポイントなので、地域コミュニティセンターや生涯学習センターなどと協力して、今までの講座、イベントとは違う点を市民に広報していくことが課題である。

本提案の特徴は、子供から大人までをターゲットとし、専門家を講師として積極的に招くことで、宇都宮市のビジョンを考え、それに向けてアクションを起こしやすい環境に整えたことである。それを強調して市民に訴える。

さらに、宇都宮市を学ぼうとする自発的な意欲が市民にあるかという課題がある。自発的に学ぶ意欲を発掘するため「宇都宮学」という勉強ブームを巻き起こす。勉強ブームの兆しは生涯学習センターや地域コミュニティセンターの活動からうかがえるので、より深い学びを共有する場であること、学んだ先に、宇都宮市に反映される意見が生まれることを魅力として伝えていきたい。

#### 終わりに

冒頭でも述べたとおり、宇都宮には様々な魅力があり、それらは他地域の人にも充分誇れるものである。これらの魅力を市民が学び、積極的に活用することで、この街はさらにすばらしい街に発展することが出来るだろう。私達が提案する宇都宮学はその手助けとなるものである。

しかし、私達が提示した宇都宮学の具体例はほんの一例に過ぎない。この街に住んでいる人ならば、さらに沢山の宇都宮の特長といえるものを知っているに違いない。

宇都宮学は成長していく学問である。市民が宇都宮の良いところを探すことで、街と共に発展していく。学び、発信することで街の魅力に初めて気づくことができる。それはやる気になればどこでも、いつでもはじめることができる。そのやる気は、宇都宮に住み慣れた人であれば「育ててくれた人や、地域への恩返し」の気持ちから、他県から越してきた人であれば「よりよい地域に住みたい」という気持ちから、外国人であれば「日本として世界的問題にどのように向き合っているか」という興味から生まれてくるに違いない。

それぞれのやる気が宇都宮市により影響力を持てることが実感できたり、そうできるかもという期待を行政が手助けする仕組みを整えば、間違いなく宇都宮市の魅力はさらに高まる。